

畳空間にかかわる住様式と住意識の検討—福岡の注文戸建住宅における— (第1報 接客・行事空間としての畳空間の動向)

奈良女大 ○今井範子 伊東理恵

【目的】十数年前に大都市圏に立地する諸住宅階層を対象に畳空間の消長について調査研究を行い、心の安らぎを感じるなど畳空間に対する強い愛着意識が確認された。室機能として予備室や客間の形で残されていくことが示唆された。その後大都市圏で供給される住宅では畳室1室を残した平面が多く供給されてきたが、最近畳室のない住宅が一定の割合で見られるようになった。また畳室の有無にこだわらない若い世代や居住者の成長などがうかがえ、このような状況から、畳空間の動向と居住者の畳空間に対する意識を把握し、今後の日本の都市住宅における畳空間の消長を今一度検討するに至った。畳空間の動向を捉えるのに的確な対象として、居住者の要求がある程度住宅計画に反映された注文戸建住宅をとりあげる。第50回大会では関西圏の結果を報告したが、今回は福岡の結果について報告する。第1報では接客・行事空間としての畳空間について検討する。

【方法】住都公団が土地分譲した福岡の2住宅地を選定し、近年に新築された注文戸建住宅を対象とし、居住者に質問紙調査を実施した(1998年8月～9月)。有効サンプル数302。

【結果】畳室における生活行為は客の就寝・応接、夫婦の就寝、祝い事・行事など。来客は多い順に近所の人、妻の友人、妻の親、妻の近所の友人などで、妻関連の客が多い。住戸内で接客に使われる空間は、リビング80%、玄関63%、門51%、客間50%、子供室43%で、リビングが高率。集まりごとの外部化が認められるが、法事、結婚関連行事、節句などの行事は畳室が考えられている。改まった客は2割、多人数の客4.5割、泊まり客は8割の世帯であると答えた。改まった客と泊まり客は畳室、多人数の客はリビングが対応している。